

光輝あふれる面影をしのんで

荒井 洋一

ベルナルド稲垣良典先生との今生の別れの知らせに接したとき、すぐに思い起こしたのは、昨年の夏に差し上げた暑中見舞いのお返事でした。それは2021年7月15日付の障害者の作品の絵ハガキに、いつものように万年筆で端正な文字により、福岡カトリック神学院にて「形而上学」を講じていると書かれ、消印から推測して、おそらく、講義を終えての帰途、博多駅のポストに投函されたものと思われました。

最晩年に至るまで、教えることを大切にされ、研究や翻訳と両立されてきました。

それは、稲垣先生の論文や講義や学会発表がけっして迷路のようなモノログに陥らずに、対話的で、極めて明晰であったことと深く結びついているでしょう。

では最初にお目にかかったのはといいますと、今から50年ほど前にさかのぼり、1972年に南山大学文学部長の役職を去り、九州大学文学部にお移りになった年でした。稲垣先生は助手が常駐し、院生8人分くらいの椅子と机のある部屋「哲学研究室」に入ってきました。真新しい背広にネクタイという紳士の服装で、輝くような笑みをたたえながら、たぶん新着図書か雑誌を見るために。私は人見知りする性格で、出迎えた助手や先輩方の背後に隠れて、あまりはかばかしいご挨拶はできませんでしたが、何かまぶしいものを見ました。この照らされるような印象はその後も変わりません。それなぜだったのでしょうか。

『天使論序説』（講談社学術文庫1996年）を手にして読んでいると、思わず、はっとして、本を取り落としそうになる一節があります。「人々

の目にうつる稲垣良典はやがて地上の生を終えると消滅してしまうが、私に現存するものとしての「私」は消滅しないし、同一性を喪失することもない」(p.63)。稲垣先生ほどに、天使の世界や神の問題について透徹した言葉で語ることのできる稀有な人の場合は、そのまぶしいような輝かしく若い面影の中に、自己同一性が示されていると言っても過言ではないでしょう。

さて、九大への着任の1972年はといいますと、あさま山荘立てこもり事件が起きた年で、まだ学生運動の余燼があちこちにくすぶっていました。特に倫理学研究室は滝沢克己教授が辞職されてから、森田良紀助教教授までもが他大学に転出され、教官が誰もいなくなり解放区になっていました。哲学研究室の教授として着任された稲垣先生がやむをえず倫理学研究室の担当教授を兼任されたため、占拠する学生との激しい衝突もありました。

「静穏と憩いを求めて」山歩きへと心は向かったと稲垣先生は書いています(「挫折から実りへ」九州大学哲学会『哲学論文集』第50輯, 2014年)が、私も宝満山や若杉山、背振山には同行しました。稲垣先生の服装は、けっしてラフな登山服ではなく、これから講義に?と受け取られるようなきちんとした服装でした。その後、私は東京の大学に就職しましたので、同行していませんが、たぶんクライマックスは長崎大学の佐々木孝洋さんが企画・立案・実施した島原の国立大学宿泊施設での研究合宿でしょう。その成果は『習慣の哲学』(創文社1981年)として結実しています。こう述べていくと、稲垣先生と倫理学研究室とは緊張関係しかなかったように受け取られるかもしれませんが、けっしてそうではなく、何度も招かれて、滝沢先生宅の書齋にて親しく語り合い、論じ合った(『神とは何か』講談社現代新書, 2019年, p.229)ことを付け加えておきます。

退官の年にあたる1992年4月25日に第1回のトマス研究会が開かれました。以来、毎月土曜日、28年間にわたり、稲垣先生は主にご自宅で、もっぱらSummaの第二部をテキストとして、トマス研究会を開いてきました。片山寛さんが司会、永嶋哲也さんが事務局を担当しました。或る日のトマス研究会の活発な、時には白熱の意見交換の様子は、実況中継のように九州大学哲学会『哲学論文集』(第50輯2014年)に

「トマス・アクィナス『神学大全』の残照を受けて」と題して投稿しましたので、ここには再言しません。

よくぞ長きにわたり続いたものと感心します。その陰には、碩学泰斗に寄り添い、支える奥様の榮子様の極めて大きなご尽力があったことに、あらためて気づかされます。私は東京在住のため毎年一度しか参加できませんでした。参加の際には、久闊を序するご挨拶の他には、ほっと一息付ける茶菓のもてなしのお礼などを申し上げたのみにて辞去しましたが、参加者の一人として、常に、心の奥底で深く感謝していました。

私の手元には、1992年の九大の退官を記念して作成された「稲垣良典先生著作目録」の初版があります。これは片山寛さんと島田佳代子さんが力をつくして冊子にまとめた労作です。これを見ると、稲垣先生の仕事がいかに膨大で、多岐にわたるかが一目瞭然です。著書や、和文と英文の論文はもとより、文献紹介、翻訳、書評、論説、随筆、シンポジウム、学会報告などに分かれていて、一口にまとめよと言われると困惑するでしょう。

このうち、シンポジウムについて紹介します。私は、1975年に九大医学部で開催された第24回中世哲学会に、生まれて初めての研究発表者として、また事務局の裏方としても参加しました。稲垣先生は、シンポジウム「プラトニズムと中世哲学」(提題・松永雄二、加藤信朗、大谷啓治、清水純一の先生方)の司会を担当されましたが、知力・体力の限界まで精魂を傾けた準備のため、おそらく徹夜をなさったので、開始前に、事務局に「少し休ませてほしい」とお申し出になったので、仮眠できる部屋を用意しました。ここで、稲垣先生の名言・金言を紹介します。「学会では大受けを狙ってはいけない。会場には必ず一人か二人の目利きがいるもの。その人に向かって発表するとよい。きっと成功も失敗もあるだろうが、目利きは正確に真価を見抜いてくれる。……師弟関係は近づき過ぎてはいけない。いつでも風通しの良い適度の距離が必要」。書評もけっして、余技とか、手すさびというわけではなく、稲垣先生が全身全霊をささげた本領発揮の部門です。

仕事は(PCではなく)愛用の万年筆で書き始めると、あまり渋滞せず、一瀉千里に書いていったでしょう。若き日の閃きと才能に満ちた文

章は豊かな学殖の花や葉を茂らせて、光彩を放ち陰影を帯びています。最晩年の『神とは何か』では、「遅々として筆は進まず」と漏らしていましたが、旅路に迷うことはなく、熟慮され彫琢された文章はすべての枝葉末節をそぎ落とし、冬の日のひたすら天を目指すケヤキの大樹のような趣です。

多作を可能にした原動力は何かというと、物静かで穏やかな外見から想像できないほどの迫力で真剣勝負のように机に向かい、ついには疲労困憊して机上にうつ伏すほど持続した粘り強い精進と言ったらよいでしょうか。それとも内に秘めた間歇泉にも似て、学問へとほとぼしる情熱と言ったらよいでしょうか。私の印象では、稲垣先生は連山の奥深くに静かに満々と水をたたえる大きな湖でした。論文やエッセイ、書評や翻訳などで、水は渾々とあふれ出て、学界や読書界を豊饒に潤しますが、けっして枯渇することはありません。

私は『カトリック入門』（ちくま新書2016年）の書評会を企画しました。それは2017年3月31日に福岡黙想の家にて開催され、福岡県や長崎、熊本を初め、九州各地からはもちろん、東京や横浜、名古屋や関西からも参加者を得て、盛会でした。稲垣先生を中心に、東谷孝一さんに特定質問を御願ひし、私が司会を務めました。その45年前の1971年に、稲垣先生は、岩波新書として、『現代カトリシズムの思想』を上梓されましたので、半世紀近くを経て、新たに新書版で、カトリシズムの本を刊行されたことになります。

93歳と言えば一般には天寿を全うしたと言えるでしょう。でも、まだまだ生きてくださると私は信じていました。思えば5年前に、『カトリック入門』の書評会が終わり、福岡黙想の家の玄関で、皆に遅れて靴紐を結んでいた時、背後から「荒井君、ご苦労だったね」と声をかけて下さいました。またアウグスティヌス『詩編注解』76-85（教文館2020年）の翻訳をお送りした際にも、お電話下さり、訳業の労をねぎらって下さいました。そのお声を思い起こすだけで、胸が一杯になり、光輝あふれる温顔が目に浮かびます。